様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３５４１

研究課題名（和文）公立学校における支援ネットワークの形成方略とインクルージョン実践の多次元性

研究課題名（英文）Strategies for Formation of Support Networks and Multidimensionality of Inclusion Practices in Public Schools

研究代表者
佐藤　貴宣（Sato, Takanori）

大阪大学・大学院人間科学研究科・招へい研究員

研究者番号：５０７３７０７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インクルーシブ教育を行う小学校での質的調査に基づいている。その最大の成果は、学校現場における人々の関係ややりとりの内部から、それをベースに障害児を取り巻くフォーマル・インフォーマルな支援関係が徐々に醸成されていくプロセスを現場での観察やインタビューを通じてクリアに示すことができた点である。
特に、盲児固有の教具を用いた指導を全体の授業進行へと接続していく教師たちのペダゴジーを解明しえた点は重要な本研究の成果である。加えて、盲児を取り巻くクラス集団が盲児とのコミュニケーションに習熟していく過程を解明しえた点は障害児を包摂する学級運営を探求するうえで貴重な知見を提供するものとなるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の舞台は１９７０年より現在に至るまで長年にわたって障害児と健常児との同一学級処遇、インクルーシブ教育の取り組みを実施してきた関西のとある自治体である。ここに立地する小学校でのフィールドワークに基づいて本研究は成立している。近年教育を語る言葉として、「インクルーシブ教育」が一定の市民権を獲得しつつあることは確かだろう。だが一方で通常学級で障害児をほかの子どもたちと共に教育することへの漠然とした不安感もいまだ根強い。そうした状況のもと、本研究はインクルーシブ教育の可能性とその具体的な方途を先進事例の分析を通してつぶさに実証し、その意義を立証する作業を行った。これこそ本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：This study is based on qualitative research conducted at an elementary school that provides inclusive education. The most important outcome of the study is that it was able to clearly demonstrate through on-site observations and interviews the process of gradually fostering formal and informal support relationships surrounding children with disabilities based on the internal relationships and interactions among people at the school site.
In particular, the fact that we were able to elucidate the pedagogy of teachers who connect instruction using teaching tools specific to blind children to the overall progress of the class is an important result of this study. In addition, the clarification of the process by which the class group surrounding the blind children became proficient in communicating with the blind children will provide valuable knowledge in the search for classroom management that is inclusive of children with disabilities.

研究分野：教育社会学

キーワード：インクルーシブ教育　フィールドワーク　小学校　エスノメソドロジー　インタビュー　視覚障害　相互行為　学校組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究を構想した当初の背景には、障碍児教育分野においてインクルーシブ教育といった概念が急速に普及していく状況があった。障害者権利条約の批准や障害者基本法の改正、障害者差別解消法の成立などを背景に学校関係者の間で障害児と健常児との共学、共育への関心が高揚し始める。また、それと同時に、合理的配慮といった概念も人口に膾炙しはじめ、学校現場も、その実施をめぐって少なからぬ混乱に見舞われることとなった。

そうした状況のもと、アカデミズムの界隈にあっても、インクルーシブ教育をテーマとする研究は一つのトレンドを形成し始める。この間、インクルーシブな授業づくり、学級づくり、学校づくりをめぐる探求は特殊教育学の領域において重要な関心事項となってきただけでなく、教育制度学や教育方法学、教育心理学など多様な教育諸学の領域において主たる探求ジャンルとなりつつある。

だが、ここで重要なのは、インクルーシブ教育が個別の学校内部で完結しうる局所的な営みに留まる事柄ではないという点である。そもそも学校教育は福祉機関や医療機関、労働や司法機関など、外部の専門諸機関、あるいは保護者や教育委員会、地域社会など多様な外部アクターとの複層的な関係によって成立する側面を持つ。こうした文脈のもとで、昨今では組織を跨いだ多機関の共同や連携を要する問題としてインクルーシブ教育を措定することの必要性も唱えられるようになってきた。本研究は、そうした学術的・現実的文脈のもとで構想され実施されたものである。

２．研究の目的

蒸気を踏まえ、本研究では、通常学校に在籍する障害児とそれらに関わる多様なアクターたちが織り成してゆく日常的な相互作用／コミュニケーションを分析することにより、障害児の教育支援に関わる重層的なネットワークの形成方略／形成プロセスを明らかにすることを目的とした。

通常学校に障害児が在席する場合、一般的に担任やクラスメート、保護者の他、介助員や巡回指導教員、心理・福祉専門職など多様なアクターがネットワークして、その学習や生活を支援する。それゆえ、障害児をめぐる学校現場の日常性を論じるのなら、障害児を巻き込みながら学校の内外で展開する重層的な日常実践や共同性のあり方に照準すると共に、障害のある子どもの日常を支える多様なアクターたちによって織り成されてゆく日々のコミュニケーションと、それを通じて構築されていくネットワークを分析／記述することが欠かせない。「障害児」カテゴリーを伴って組織化される学校の日常性はそうした日々の営みにおいて／よって具現化されているはずだ。こうした認識に立脚し、障害児と、彼ら彼女らを取り巻く人々との間の相互作用、あるいは障害児を取り巻くアクターたちの間に生じる日常的なコミュニケーションは、どのような関係性やネットワークをいかに形成・維持・更新・変化させていくのか、こうした問いに取り組むこととした。そうしたテーマに取り組む作業こそ、実質的に障害児のインクルージョンを推進するための具体的な方法論を探求する革新的な企てとなるに違いない。

３．研究の方法

上記の研究内容を具体的な研究課題として整理すると、それは以下の三つに大別される。(1) 通常のクラスルームにおいて、障害児を巻き込みながら展開する日常的な相互作用や援助実践の過程や特徴を詳細かつ厳密に解明する。そのうえで、(2) 障害児を取り巻くそれぞれのアクターが日々のコミュニケーションを通じて重層的なネットワークを形成し、障害児支援の仕組みを構築していくその過程を描出する。これにより、(3) 障害児にとってもっとも望ましい支援の仕組と、それを実現するネットワークのありかたを解明する。

そうした研究課題に取り組むにあたって、最適な研究手法となるのは、参与観察やインタビュー、ドキュメント分析など、定性的な調査手法である。調査の主たるフィールドは、大阪府北部の都市に立地する３ヶ所の公立小学校である。

本研究では、１９７０年代から障害児と健常児との同一学級処遇（インクルーシブ教育実践）を志向してきた小学校でのフィールドワークを上記の研究課題を追求するための中核的な方法として位置づける。具体的には、調査の中心とする小学校を一つ設定し、その学校を週に１回、他の２校を月に１回ずつ訪問し、３年間にわたって調査を継続する。その際、分析の対象領域を便宜的に教室空間、校内組織、学校と外部社会との境界というように３つのフェイズに区別し、それぞれの位相における社会関係・コミュニケーションについて分析していくこととした。

４．研究成果

本研究は、インクルーシブ教育を行う小学校での質的調査に基づいている。その最大の成果は、

学校現場における人々の関係ややりとりの内部から、それをベースに障害児を取り巻くフォーマル・インフォーマルな支援関係が徐々に醸成されていくプロセスを現場での観察やインタビューを通じてクリアに示すことができた点である。

特に、盲児固有の教具を用いた指導を全体の授業進行へと接続していく教師たちのペダゴジーを解明しえた点は重要な本研究の成果である。それに加えて、盲児を取り巻くクラス集団が盲児とのコミュニケーションに習熟していく過程を解明しえた点は障害児を包摂する学級運営を探求するうえで貴重な知見を提供するものとなるだろう。

本稿が着目したのは、全盲の子どもとそれをめぐる社会関係である。子どもたちは、視覚障害にレリバントな諸々の道具を当該児童とは別様に用いることにより、ないしは、当該盲児と共同使用することで、双方の流儀を横断する共通のアイデンティティをともに樹立し、特有の秩序をもつ学級コミュニティを相互的に構成していた。また、流儀を異にする盲児とのコミュニケーションに関わる独特の社会的コンピテンスを、晴眼児童たちは教師たちと当該盲児とのやりとりについての観察や模倣によってのみならず、子ども同士のインフォーマルな関係の中でなされる知識の伝達や協同的な学びの集積を通じて、相互的に発達させていた。ここで明らかとなったのは、障害児のいる学級コミュニティの秩序を構成していくメンバーのコンピテンスである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 木村祐子・鶴田真紀・末次有加・佐藤貴宣	４．巻 113
２．論文標題 障害児教育に関する社会学的研究の動向	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育社会学研究	６．最初と最後の頁 73-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤貴宣・久保田裕斗	４．巻 30
２．論文標題 障害児と健常児による遊びの共同的達成―すごろくゲームを組織する子どものコンピテンス	５．発行年 2024年
３．雑誌名 子ども社会研究	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 佐藤貴宣・久保田裕斗
２．発表標題 障害児と健常児による遊びの共同的達成―すごろくゲームの組織化に見る子どものコンピテンス
３．学会等名 日本教育社会学会第74回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐藤貴宣
２．発表標題 他者性を再特定化するインクルーシブ教育の可能性
３．学会等名 第73回教育社会学会大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

1．著者名 佐藤 貴宣、栗田 季佳	4．発行年 2023年
2．出版社 ちとせプレス	5．総ページ数 384
3．書名 障害理解のリフレクション	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関